

# 地震予知の「理論とメカニズム」が判りました。

JYAN 研究会 会長 國廣秀光（研究会の3観測網他研究会員）

序章 地震学界では、数十年前から、また、阪神大震災以降は多くの予算をかけても判らなかつた地震予知ですが、始めて、地震予知の「理論とメカニズム」が判りました。

地震観測の基本は地震計ですが、私は、全く違う電磁気観測でメカニズムの解明ができたのです。この研究に24年費やしましたが、本年の日本地震学会(京都大学)と地震予知学会で発表します。

当電磁観測方式の観測網とシステムができれば、直下型地震は1週間前、トラフ大地震は2週間程前に危険警報が出せるので、32万人のトラフ災害死亡者が助かる事になります。ただし、観測網は電磁観測3方式で、上空観測(数十局)を除き、中・下方向の観測は現地地震計と同程度の設置で、予知3原則を遙かに超えた内容となり、確率80%以上の高信頼情報が発信できるでしょう。



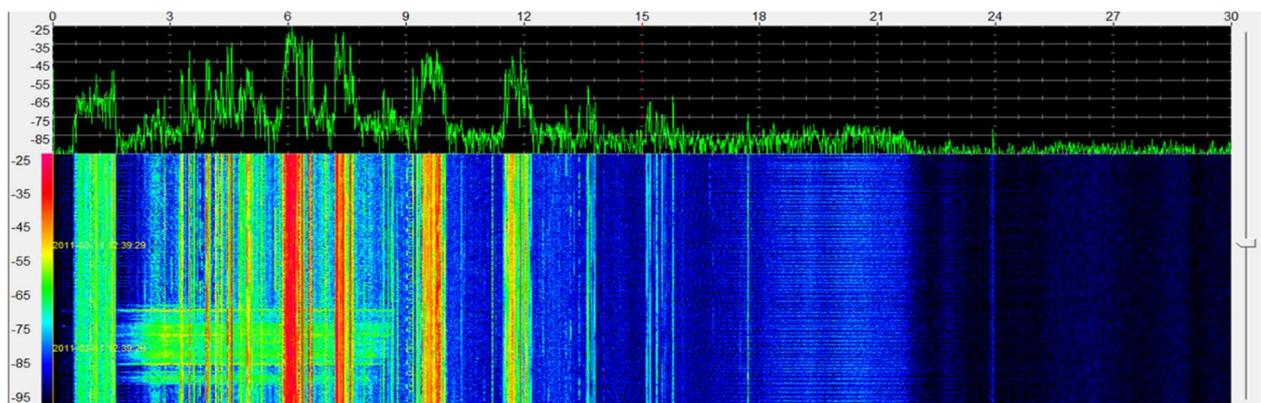
## 第1章 疑問と回答

### 1項 地震の大疑問?が、解けました。

地震予知の理論やメカニズムは、未だ、観測方法や予知技術等が発表されていません。当該、予知理論やメカニズムは、これまでの地震観測とは全く違う、電磁波や電磁気の観測で膨大なデータを根拠に理論を構築しました。その概要は ① 地下での縊や歪みで、

輻輳等の圧力が集中すると、大きな圧力や応力波が発生し、周囲へと伝播します。 ② この時、深層域で起きた輻輳や応力波は、周囲の高圧に圧倒され、地震動は殆ど起きません。 ③ しかし、この応力等のエネルギー波が地表層まで届くと、周囲の地圧が極端に無くなるため、圧力や応力エネルギーを含んだ岩盤等は、急に膨張拡大を始め、周囲の地層や岩盤等を破壊して地震動を次々に起こし、断層を形成するのです。

2項 解析後 地震の「振原」は地下深くでは無く、殆どの破壊や断層形成は、表層付近で起きていました。この新しい地震の理論とメカニズムは、地震前兆として観測した永年の電磁データや、地震計で観測した振動データが理論の根拠となっています。解析と分析を重ね、多くの観測データを調査し、慎重に検討しましたが、現在の震源発表で、震源の深さについては推定根拠に無理があります。



上の画面は東日本大震災での電波観測グラフで、電磁波レベルと電磁ノイズに異常がありました。

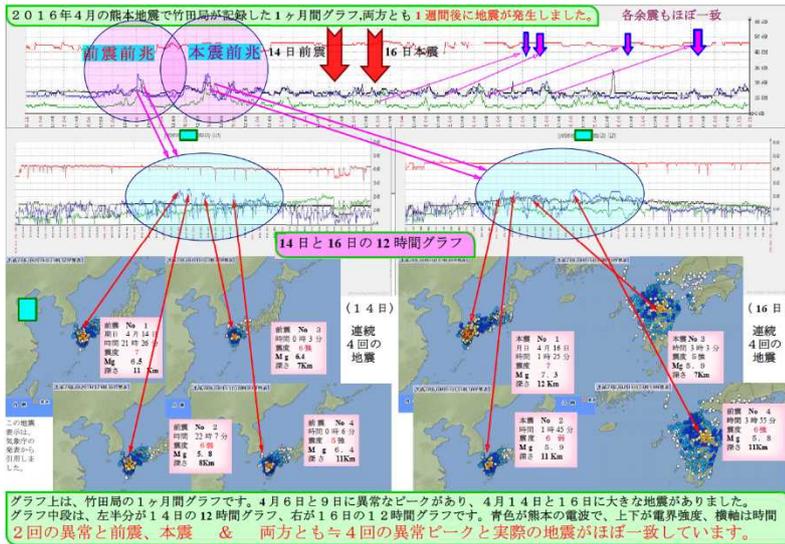
## 第2章 地殻の異常観測は、電磁気観測で詳細が見える。

### 第1項 地象観測の目的と概要

現在、地震計観測は気象庁や各機構と市町村等で約4千機が稼働中で、海洋観測にも拡大中です。電磁的観測は、実験段階ですが地象全体や地殻変動、特に噴火等の危険発見に最適な観測方法です。

### 第2項 電磁気(波)の観測の実際

電磁気(波)観測は、地震等の約1週間前に前兆異常が掴めることが判り、最も注目されています。



1 電磁気観測は、約1週間前に危険度や切迫度が判りますが、そのメカニズムの解明によって、電磁的な地象観測が脚光を浴びています。今後急速に電磁氣的地象観測の研究や技術開発が進むことでしょう。

2 左のグラフは、熊本地震での電磁観測で、横軸が1ヶ月間の電磁波強度観測グラフです。地震の前には、特別に大きな異常変動が2回ありました。中段は、6日間の観測ですが、地震回数に応じた異常ピークが出ています。

3 このピークと実際に起きた地震が完全に符合し、半年後までの余震迄も Perfect に一致しています。

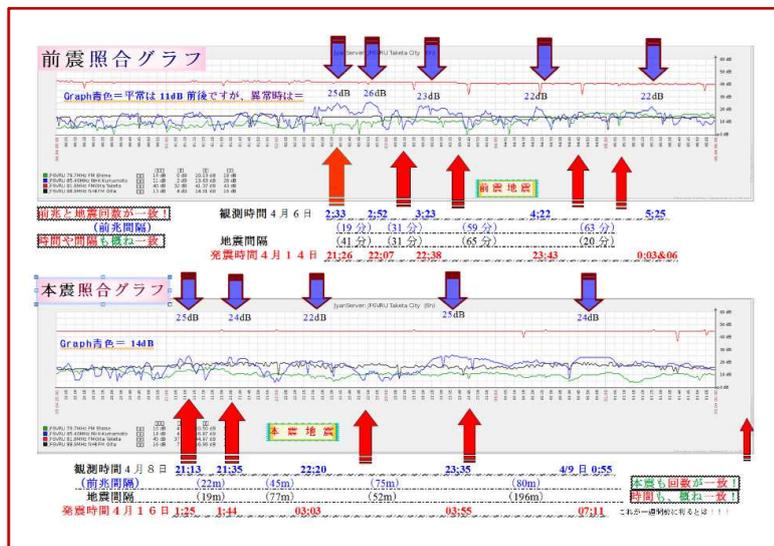
### 第3項 グラフの解説

左のグラフは熊本地震の前震と本震(下)の電磁波観測と、実際に起きた地震を時系列で照合した6時間のグラフです。

青色の下向き矢印は、電波観測から異常ピーク通りに地震を予測してマークしたものです。

赤色の上向き矢印は、実際に地震が起きた発生時分等を示しています。

**結果** ◎前震、本震とも観測の異常回数と地震発生回数や時間、大きさ等が



同じです。◎電波観測での異常ピーク間隔(分)と、実際の地震が起きた経過時分もほぼ同じになっています。従って、1週間前の観測時に、地震の3要素、地震の回数、時分的な地震の間隔や、大きさ等、約90%以上の確率で、1週間後の地震発生状況が判っていたこととなります。

## 第3章 電磁波観測と前兆

### 第1項 地殻変化で現れる電磁波(気)の現象!

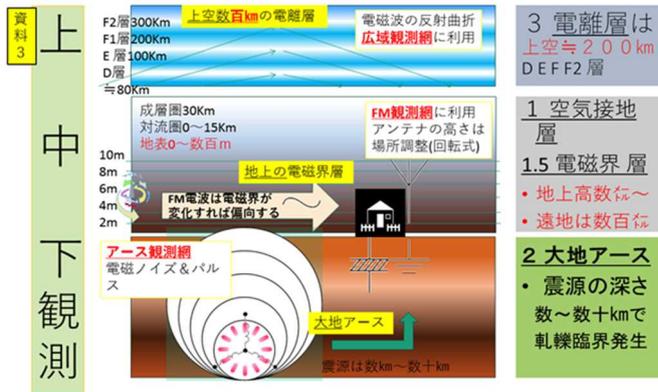
- 1 電磁パルス(ノイズやパルス) = 大地の軋轢状況を観測して把握する(アースノイズやパルス)
- 2 地電磁界(低周波放送等アース領域) = 直下型地震等の切迫度把握(大地電磁界も観測する)
- 3 中短波帯域(BC放送帯からHF帯ノイズ) = 広域探索(回転空中線で電離層反射波を観測)

4 FM 波観測網 (FM 放送波等を全国網で観測=FM 放送波の常時観測から各解析に利用可能)

第2項 3方式の観測で、予知3原則と切迫度等観測が時分的に危険度判定

電磁波観測と地震の確率は、熊本地震で前本震等80%(回数&時間)以上が可能

結果1 1週間前に、異常を観測した通りに地震が起きた事が証明された。 結果2 電磁波異常と実際の地震は、相似形である事が判った事から、両方の原因は、一つの現象であることが判った。



第3項 地象観測の電磁波受信と FM 観測等の要領

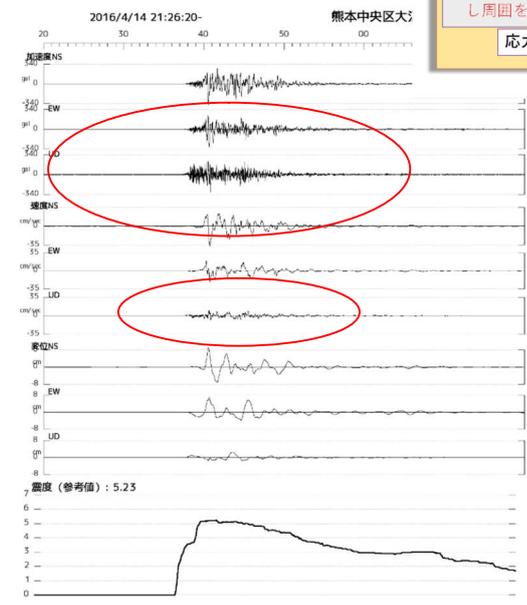
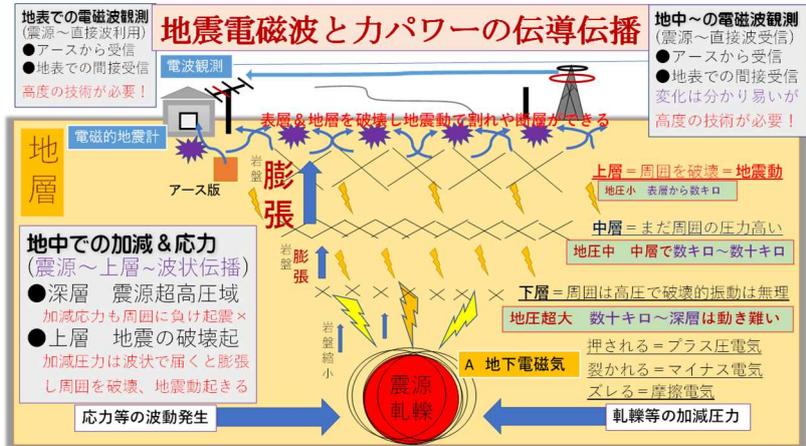
FM 電波は、常に電力が一定なため、放送波の伝搬ルートに、電界異常があれば、電界強度が直ちに変わります。異常の観測に優れています。FM 電波の観測は、四方を常時観測できるため、観測網ではクロスチェックが可能となり方向探索も可能です。

第4章 なぜ、地震予知ができるのか？

1項 メカニズム と 理論解説 (電磁波観測と地中観測 Data を図示しています。)

① 地震の原因は多種多様ですが、主な原因として、地殻を変動する歪や撓等の軋に、各種加減圧が加わって、地震の元となるエネルギーや、反発的応力に、電磁気等が発生しています。

② 加減圧等で起きた電磁気は即周囲へ伝わり、地上でも簡単に観測できるので直ちに変わりが判るが、地震を起こす圧力パワーやエネルギー(以後「PE」と言う)は、地下深層の場合、周囲の高圧に阻まれ、破壊的な地震動に発展できず、PE 波と



して周囲へ、波状伝播しながら拡散していきます。PE 波が地表層の低圧域まで伝播すると、PE の塊は、周囲の圧迫度低減によって圧が逆転し、膨張を始めます。この膨張が、周囲を圧倒すると、周囲への亀裂や破断破壊が一気に始まって地震動を起こすのです。PE 塊が大きい場合は、震動域が広くなり、断層も拡大し、連続的な地震動を誘発して、地震が拡大していくのです。上図【伝播解説図】地震電磁気(電磁波)と、軋波(力波)に、電磁波(即時伝搬)と、軋波(数km/日)の伝播速度等を表しています。膨張破壊がポイントです。

前頁図 熊本中央での地震計観測図です。一番上が地表の観測、上から三番目が地下250mでの観測です。地下の上下動に対して、地表の揺幅は数倍の大きさとなっています。これが、膨張の証拠であり、地表付近での爆震根拠です。また、右下図が決定的な証拠図で、震源地の地表と地下250mの上下震動です。やはり、地表では、岩盤等の膨張で破壊的な地震動が起きる根拠を示しています。

## 第5章 約1週間前に予知可能な根拠

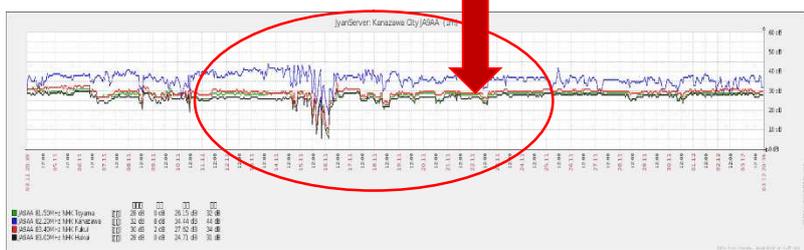
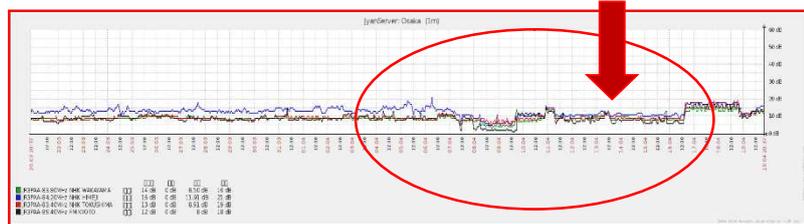
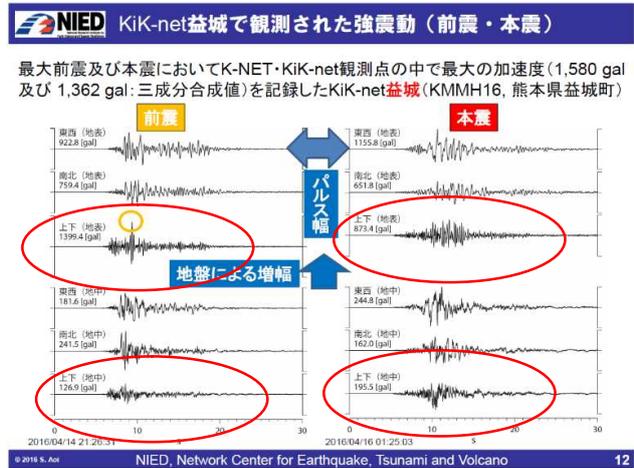
### 第1項 電磁波伝搬と力波伝播速度の解説

地震の元となる軋轢が起きたときに、電磁波と力波（軋轢や応力波等）が発生します。電磁波は直ちに地表の観測網に捕捉され異常が察知できますが、力波（パワーウェーブ）は、隣から隣へと波動的な伝播する性質があり、1日に数kmしか伝わりません。（岩盤や地質にもよりますが、1日に1～4キロ程度が限度です。）従って、電磁波と力波の伝播速度の「差」だけ、早く、予知できたのです。

技術1 観測網でのDataから「いつ、どこ、大きさ」を計算して3原則を示す事が可能です。

技術2 電磁的な3種類の観測網システムで、約1週間前に予測を発表する事が可能です。

結論「地象観測は、3電磁観測で、地殻変動をPerfectに把握し、危険警報の発表が可能です。」



地震の観測例 左淡路島地震と左下長野地震ですが、淡路島はレベルアップ (2013年4月) 長野地震はレベルダウン (2014年11月) 他に、多数の観測例と10年の経験則有

### 第2項 地震と不思議な電磁現象

地震動と電磁異常や、表層破壊の根拠、データと電磁的な解説です。なぜ? ① 電磁観測で異常変化が判るのか。なぜ? ② 地殻変動で電磁界に変化が現れるのか? なぜ? ③

震源場所や大きさや時期が判るのか? なぜ? ④ 3原則等の自動計算ができるのか? なぜ? ⑤ 時分単位で切迫度が判るのか? なぜ? ⑥ 観測グラフに上下反対方向の変化が表れるのか? トラフ地震はどうして観測するのか? 新発見の5電磁現象等 講演時に時間があれば解説ができます。

### 第3項 地震発生根拠 (詳細解説)

1 直下型地震やトラフ地震等の原因となる軋轢他は、月や惑星と地球の自公転等、プレート移動、海流、気象や、マグマ流、地殻移動(上下動含)等々によって起きています。

2 また、超深層では、極高圧と高熱で熔岩状となり地震破壊は困難です。例え PE が伝播しても、数十から数百kmの遠距離伝播では、減衰が大きく地震自体も小さくなり問題とはなりません。

「電磁観測が正しい」根拠は、地下で起きた軋轢通りに電磁界が揺れ、その通りに地震が起きているので、結論は、同じ原因から起きた事象は、到着時間が違っても、全く同じ現象になるのです。